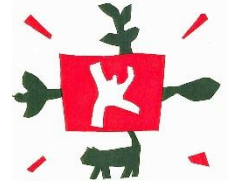


共同通信



2026年3月29日 354号(564号)

日本基督教団 西宮共同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22

TEL 0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email koudou@gamma.ocn.ne.jp

<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

To tell the story 253

説教「神の国」

マルコによる福音書第1章25節

「主の祈り」が祈る、「…天にまします我らの父よ、ねがわくはみ名をあげさせたまえ、み国を来らせたまえ」の「み国」が指し示しているのは「神の国」です。ここで祈られている神の国は、以下のような理解であってはならないはずで、「未来を約束する気休め」「敬虔な人間の未来への好奇心を満たすこと」「満たされない願望や不安の投影であってはならない」(ハンス・キェンク「イエス」)。

「神の国」については、イエスによって以下のように言及されています。「言った『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音において信ぜよ』」(マルコによる福音書1章15節)。

「神の国は近づいた」とする、マルコ福音書の冒頭は、「福音」という言葉で始まります。「…イエス・キリストの福音のはじめ。預言者イザヤに『見よ、我

が使者を汝の前に遣わす。この者が汝の道を整えるであろう。荒野で呼ばれる者の声。主の道備え、その道筋をまっすぐにせよ』」となっています。

その福音は、イエスによって宣べ伝えられます。「…ヨハネが引き渡された後、イエスはガリラヤに来て、神に福音を述べ伝え…と。こうして言われている福音、神の国は、それが述べ伝えられるのは、ガリラヤであり、「神の国」について語ることに、即ち「福音」であり、当然それは、ガリラヤでも実現されなくてはならないこととして、述べられます。

「ねがわくはみ名をあげさせたまえ、み国を来らせたまえ」実現する(実現しなくてはならない)のは、当然、私たちの現在でもある、というのがこの祈りの主旨であり言わんとするところです。

それは、ひるがえって、以下のような指摘にもなります。

「…現在と窮乏と罪にもかかわらず、それを神の国と言うには、あまりにも悲しく分裂し続けている」。「…この世界と社会は、それがすでに完全であり、最終的なものと言うには、あまりにも不完全であり、非人間的である」。(ハンス・キュンク「イエス」)

だからと言って、毅然とした人間社会が理想化される訳ではありません。

たとえば、「…安息日は人間のためであるのであって、人間が安息日のためであるのではない」などのような言葉で「決める!!」イエス（これって、「校則は子どものためであるのであって、子どもが校則のためであるのではない」などにも、ぴったりの決まり文句）ではあるのですが、そんな「せりふ」で決める一方で、この物語（マルコ 2 章 23 以下）からは、なんとも平凡な日常の営みをかいて見ることが出来ます。

たらふく食べている訳でもなくて、言わば食うや食わずの人たちとイエスが、畑の中の道を歩いていて、麦の穂をつんで食べてしまい、それが見つかったとがめられた時、そう言えば、聖書・御言葉にこんなのもあったな、とつぶやいた、という感じの光景なのです。

食うや食わずだったら、「働けよ」と言いたくなりますが、それがままたまなくて、「イエス様、どうしたらいいでしょう」と問われます。その時たまたま歩いていた、麦畑の道で、手が届いた麦の穂をつんでくちやくちや食べ始めたイエスに、一緒にいた人たちも思わずそれに

習ってしまった。たぶんそんな具合なのです。

又吉直樹の新しい小説は「生きとるわ」です。読み始めて、登場人物たちとその生き様に「辟易」し、「なんだこりゃ！」と閉じてしまいたくなる、そんな物語なのです。文字通り「辟易」するような人物たちのことが、これでもか、これでもかと、書かれて、それが最後まで続いて「終り」になります。辟易するような人たちの、辟易するような行状を、よくもまあ、350 ページも書いたものだと、書き切ったものだと感心させられる、だから表題は「生きとるわ」なのだと思います。

麦畑の中を歩いていて、自分もお腹を空かせていて、たまたま手にした麦の穂、麦をつんでくちやくちや食べてしまうイエスは、マルコによる福音書 1 章の「駱駝の毛を着て、革の帯を腰のまわりにしめ、蝗（いなご）と野蜜を食べていた」ヨハネと、その食生活においてはそんなに変わりません。

そうして、命をつないでいたイエスがたまたま手にして食べていた、麦の穂のことで、とやかく言われた時、それがしかも安息日であった時、「…安息日は人間のためであるのであって、人間が安息日のためであるのではない」は、高邁な論理であると言うよりは、生活者の生きた言葉としての論理、と言うよりむしろ「理屈」(屁理屈)に近いのです。それはきれい事で生きていたのではない、きれい事で生きられない人間の生きた論

理、智恵でもあるのです。

「主の祈り」の「御国を来らせたまえ」の「神の国」は、それをただ天に見るのではなく、この私が生きる現実の只中に「御国を来らせたまえ」と祈ります。

しかも、その「祈り」を、現実の只中で生きていたとすれば、麦畑の中を歩いて、その穂を食べている人たちは、ある人たちにとっては、とつても目障りでした。その行状も、姿も、しかし、その鳥合の衆のように見える、行状・姿こそが、人間だというのが、「安息日は人間のためにあるのであって、人間が安息日のためにあるのではない」という言葉に結実し、更に、それこそが地上で実現している「神の国」「時は満ち、神の国は近づいた」のイエスの神の国なのです。

その現実を、生きて、生き抜いて、それを「神の国」としたのが、マルコ福音書1章のイエスの神の国だったとしても、そんなに間違っていないように思えます。

祈ります。

(菅澤 邦明)



マーガレット

今月の畑だより

「なぞなぞのすきな女の子」(著:松岡恭子、画:大社玲子/福音館書店、2023年)の表紙の見開きのなぞなぞの一つが、「まあいるからだに おへそがたくさん はるになると おへそからめのようなもの なあんだ?」で、正解は「じゃがいも」です。

1個の「種じゃがいも」の「おへそ」を見極め、2つないし、3つに切り分けて、そこに「灰」を塗り付け、約240個を、伏原町の畑に植えました。

最近、その際にマルチシートを張って、植えることにしていますが、そのマルチシートも、ジャガイモ用があつて、20センチ間隔に穴が開けられています。とても親切なのです。

その畑では、昨年、淡路三原伝道所の佃先生に手配してもらった玉ねぎがすくすく育っています。春先の育ち盛りの玉ねぎはすくすく育っている緑の部分も、今のうちだったら全部食べられます。3月19日(木)の「まち食堂」では、料理長の吉田麻希さんが緑の部分を酢味噌和えにしてくださいました。とにかく、今のうちなのです。

伏原町の畑では200株のイチゴも寒い冬を越して、赤茶けた葉っぱの間から、緑色の葉っぱ、そして白い花も、ちらほら咲き始めています。

そして、玉ねぎ、じゃがいも、イチゴ

の畑ではあるのですが、約150球のチューリップも芽を出し始めています。

2月の中頃から咲き始めた水仙は、今も咲いていて、1つかみずつ位切って、持ち帰った水仙は、道行く人たちに買ってもらったりもしました。今も、次々と咲いている白い水仙の周囲では、ラッパ水仙も咲き始めています。

そうしたものは、畑の「主役」ではあるのですが、もう一つ別の「主役」がいるのも、幼稚園の伏原町の畑です。

その畑の「今年の主役」として、1番頑張っているのが、「カラスノエンドウ」です。

その畑の「今年の主役」としてなのは、年によって主役が変わるからです。2、3年前の主役は「ノゲシ」でした。ところ構わずちょこっと目を出して出したかと思えば、気がつくと、立派に葉っぱを広げて、深く深く伸ばした根っこが、簡単には抜けなくなるのが「ノゲシ」です。かわいい花に似合わず元気なのです。

今年は、圧倒的な「カラスノエンドウ」の隅っこで、「スズメノエンドウ」も、ツルを伸ばしています。



あんなこと こんなこと

2026年3月6日(金)18時～20時ごろ

関西神学塾 福嶋 揚さん 連続講座

「ハンス・キュングの生涯4 教皇の不可謬性を問う」

西宮公同教会 集会室

4回目の講座として、福嶋 揚さんをお迎えました。ハンス・キュングの生涯について、穏やかな語り口で、丁寧にお話しくださしました。少し難しい部分もありましたが、ゆったりと耳を傾ける豊かな時間となりました。



2026年3月13日(金)18時～20時ごろ

関西神学塾 四方 哲さん 特別講座

「あれから15年、福島はどうなっているのでしょうか？」

西宮公同教会 集会室

2011年3月11日に発生した東北地方の大地震に伴う津波で、東京電力の福島第一原子力発電所で発生した原子力事故より、15年という時間が経過しました。事故直後から、四方さんは、福島の今、原発について報告を続けてこられました。



2026年3月15日(日)

ユスラウメ開花

西宮公同幼稚園 入口

幼稚園の門の前で、ウメに似た5弁の白色の花を枝いっぱい咲かせます。梅雨の初めごろには、直径1cmほどの真っ赤な実がつかます。



2026年3月16日(月)9時~17時ごろ

西宮公同幼稚園 園庭の剪定

何年かに一度の、新樹園さんによる西宮公同幼稚園の園庭の剪定が行われました。始めは4人で作業されていましたが、最終的には6人の方々で、お仕事を担っていただきました。ご苦労様でした。



福島東電の事故 そこから考える

2011年3月11日14時46分。東日本大震災、福島第一原発事故が発生しました。原発は双葉町と大熊町を跨いで建っています。その1号機、2号機、3号機は稼働中。地震の影響で外部電源は喪失。非常用ディーゼル発電機が稼働しました。ところが津波が発生、電気を得ることができなくなりました。核燃料は絶えず冷却し続ける必要があります。炉心内の温度は急速に上昇します。その水蒸気が発生し、圧力が高まります。被覆管のジルコニウムが水と反応して水素も発生しました。その水蒸気、水素は定検中の4号機にも流れ込みます。結果、4つの原発が水素爆発という最悪の事態に陥りました。環境中に大量の放射性物質が拡散することになったのです。

放射性物質は、プルームとなり、南側へ流れました。このプルームには放射性のヨウ素、セシウム、ストロンチウム、プルトニウムなどが含まれています。その後、風向きが変わり、プルームは北上。双葉町の北側にある浪江町を流れる請戸川沿いに浪江町津島、飯舘村に到達しました。ここで雪となり、大地を汚染するのです。放射性物質で高濃度に汚染された地域が生まれました。津島地区は内陸です。沿岸部の住民が多数避難していました。その事実を知らされずにいた住民が被曝することになりました。一方、飯舘村は長年、農業を大切にしていた村おこしに頑張っていました。当時の菅野村長は

村民の避難を躊躇しました。さらに政府も正確な情報を村当局に提供することはありませんでした。飯舘村は放射性物質に高濃度に汚染されながら避難指示は発令されませんでした。全村民が避難するまでには3か月を要したと言われていました。

飯舘村は住民の避難を必要とする地域であるのに誰でも入城できました。京都大学原子炉研究所に今中哲二さんという助教がいました。今中さんは、長年、原発の負の側面を研究してきた異色の研究者です。4月中旬、チームを組んで飯舘村へ放射能測定のために入りました。白い防護服を着こみ村内を測定して回ったといいます。「村はとんでもなく汚染されている」と測定値を村長に示して、「すぐ避難したほうがよい」と進言しました。ところが村長はその進言を握りつぶしました。

プルームは飯舘村から反転し、福島県の中通り（福島県は太平洋側から浜通り、中通り、会津と分けられます）を南下しました。中通りは福島県では人口が多い地域です。福島市、郡山市と30万都市が並んでいます。浜通りほどの汚染は発生しませんでした。大地に放射性物質が降下したことは間違いありません。プルームは北関東、首都圏にも到達しています。福島県の沿岸部を中心に東日本が放射性物質によって汚染されたのは間違いありません。

福島県は農業が盛んです。首都圏にも近いので野菜栽培に熱心な農家が何軒も

あります。二本松で有機農業を営んでいる大内信一さんもその一人です。大内さんの農地にも放射性物質は降り注ぎました。収穫を待つハウレンソウやネギ。出荷停止でした。大内さんは野菜を廃棄処分したといひます。

「もう福島では農業はできないのか」と大内さんたちは悩みました。後に「野菜を信じてみよう思った」と大内さんは語っています。農家はタネをまき、農地を耕し続けました。

一番多く降り注いだ放射性物質はセシウム 134 と 137 です。前者の半減期は 2 年、後者は 30 年です。これらは表土の 5 センチで留まっていることが判明しました。農家は表土を反転させ、作物に放射性物質が移行しないようにしました。セシウムはカリウムと同じ性質を持ちます。だからカリウムを農地に散布して作物がセシウムを吸収しないようにしました。さらに土壌がセシウム粒子を吸着して固定化するということが分かってきました。つまり福島の農作物に移行した放射性物質は基準値を大きく下回っていたのです。

京都に榎田劭さんという元科学者がいます。榎田さんは 1973 年に始まる伊方原発住民訴訟に専門家として原告側の証人として法廷に立ちました。燃料棒を覆うジルコニウムの脆弱性を証言したのです。ジルコニウムは水と反応して水素を発生させます。福島での水素爆発を予測していたのです。判決は原告敗訴。榎田さんは京大工学部を辞し、使い捨て時代を考える会を立ち上げ、現代文明を考え

る市民運動に携わりました。その中で有機農業運動に取り組みました。

榎田さんは原発直後、このまま有機農業を続けることができるのか、と悩んでいた大内さんたち農家を訪ねました。試行錯誤しながら安全な作物を作ろうとしている福島の農家を見捨てるわけにはいかなないと、榎田さんは考えました。仲間と立ち上げた共同購入会で「福島の野菜を共同購入しよう」と呼びかけました。

「先生は私たちに毒を食えというのですか？」とある会員に言われたそうです。

「私は福島の皆さんが食べているものを食べます」と答えたそうです。

安全安心は難しい問題です。ただ榎田さんは元科学者。その榎田さんには、福島の有機農家を信用しても大丈夫という確信が会ったのだと思います。

私たちは「放射能」という恐怖によって支配されたのかもしれない。生き物にとって放射能は避けるべきものです。一方、私たちは日々、生活の中で被曝しています。宇宙から食べ物から大地から放射線は出ています。私たちは日々、生活の中で被曝しています。生命はこの被曝と折り合いをつけて生きながらえてきたのです。

被曝することで細胞は傷つきます。そうするとほとんどの細胞は修復します。修復に失敗した細胞はみずから自死（アポトーシス）します。これに失敗した細胞ががん化するわけです。がんという病気は複雑な病気です。

私たちの文明がもたらした放射能との共存という現実をよく考えてみる必要があるのではないのでしょうか？

原発事故の責任は、東京電力と原子力政策を推進した政府にあります。彼らは責任を取ろうとしていません。東電の幹部 3 人を刑事告発した裁判は無罪。事故前、津波の影響が指摘されていたのに、無罪です。国は原子力政策を改めようとしていません。日本には核兵器は存在しないとされています。ところがその元となる放射性物質はしっかりとストックされています。この辺にも政府の隠された意図があるとはずです。

私たちはまず東電と国にその責任を問いつけること。そして原発とは共存できない。今、私たちの生きる世界はとんでもなく危うくなっています。足元からもう一つの生活を少しずつでもいいので取り戻すことも大切だとも思うのです。

(四方 哲)

※ロシナンテ社では、福島は今、原発問題について、PDF 版「ロシナンテ通信」をインターネット配信しています。

年間購読代 3600 円 お申込みをよろしくお願いたします。shikatasatoshi@gmail.com



ハルシャギク

～♪ぼくのみる空と きみのみる空は
つながっているから～

名護七曲（154）

「分別とは」

ディオゲネス。紀元前4世紀頃のギリシャの哲人。シノペ出身だけどアテネに上京してアンティステネスが開校していたキュニコス学派の学哲学（学問）を学んでおりました。そのためかかなり極端な禁欲主義者と成りまして、彼は水を飲む用のコップ以外すべての持ち物を捨て去り、パンツ一丁で野良犬のような生活を日々送っていたと言われてます▼或る日広場にて少年が手で水を掬って飲んでいるのを見て、唯一の持ち物であったコップをその場で投げ捨てたという逸話は有名です。どこまで本当の話か分かりませんが、古代ギリシャにおける究極の実践ミニマリストの一人であることに間違いありません▼簡素な生活に憧れ私も昨年末から身の整理に取り組んでおるのですが、混沌としたこの部屋の、まづどこから手を付けたらよいのやら…。考えるだけで既に2か月が経過。それどころか年末にある程度物を寄せて、多少は秩序を取り戻したはずなのに、ものの2か月でもうこの有様。そう、形あるすべての物はただ崩壊に向かって進みゆく、そんな大宇宙の原則をさえ感じるこの部屋は、それ自体美しくもあり、あるいは又もはや人の手に負えるものではないことを我々人類に静かに語りかけているの

かもしれないのです▼片付けの極意としてよく言われますのが「まず要るものと要らないものを分別せよ」であります。一いやいや、それが出来ないからこのような事態に成っているわけではないですか。自室を片付けようとする者にとって最も越え難い最初の難題が「要るか要らないかの判断」。それを世の断捨離アドバイザーたちはまるで分っていない▼分別とは？ とりあえず目の前にあります4つの国語辞典の内の一つを手にとって調べてみましたところ、そこには「世の中の是非・道理をわきまえること。また、その能力」（旺文社）とありました。わたくし的にやや受け容れ難い内容であったため、念のため三省堂の方も引いてみましたところ、こちらには「社会人として求められる、理性的な判断」とあり更にショック。「部屋が片付いていないあなたは社会人として不適合」って言われてるようで、一気に萎えぼよピーナッツ▼だが、ディオゲネスもアリストテレスも、歴代の賢者と呼ばれる人たちはみんな、何よりもまず分別することからスタートしておるのです。片付け上手の言う通り、何はともあれ要るものと要らないものを分けないとイケないのです。今週はあれなので、来週ぐらいから頑張ろうかな～って思います。

（羽柴 禎）

つとかいわ・あれこれ

西宮公同教会の住宅、テナント施設の一部（西側）に、ひっそりと ARTGARAGE（アートガレーヂ）と表示されている場所があります。

かつては、子どもたちの居場所、催しものの会場、また 1995 年の大地震の時は、ボランティア活動の拠点として、たくさんの支援の人たちが詰めかける場所になりました。

その後は、限られた人たちの活動場所として、文字通りひっそりと活動してきました。

その ARTGARAGE（アートガレーヂ）（*1）を少なからず、活性化するためのアートガレーヂ運営委員会が発足することになりました。西宮公同教会、及び西宮公同教会 地域共同共生支援活動事業のもう一つの拠点として、その全体の動きにつながりながら活動することを願っています。

以下、現在実施ないし、目指している活動の項目を上げると以下ようになります。

教会学校・エイサー隊
みんなのひろば
まち食堂
こうどうぶんこ
園芸サークル

2 年前にエイサー隊を募り、現在はメンバー 13 人で、月一回の集まり、昨年は、神戸の「統一マダン神戸」にも参加させていただきました。

教会学校は、日曜日の朝の集まりですが、2 月からは、「放課後・教会学校」の活動も加わり、なかなか賑やかな集まりになっています。

そして、7 月の「ほしまつり」、11 月の「公同まつり」には、アートガレーヂも実行委員の一員として広く活動を担うことになります。現在はひっそりと静かですが、広く地域の人たちに人たちとつながる活動が一步一步実現していくはずです。

（*1）アートガレーヂは、「ヂ」であることをお間違いなく。

（K）

最早 3 月。梅の便りも遠く過ぎ去り、桜の開花予想のかまびすしい近頃です。

3 月は別れの季節でもあります、新しい旅立ちの準備の時でもあります。私の孫も 1 人は小学校卒業。もう 1 人は中学校卒業と、それぞれに新しい世界に出発します。ついこないだまで、ベェーベェーと泣いてばかりだったのに、大きくなったもんだ!

思います。そんな孫たちを見ていると、私もこんな歳だけど、何か新しいことを始めてみようかとふと思ったりする今日この頃。少し前から新しく編み物を始めた教会女子も現れて、日曜日の雰囲気と和みます。最近では「編み物男子」と言う言葉もあるらしく、ちょっとブームらしい。ずいぶん前に、トランスジェンダー役で生田斗真が主演だった。「彼らが本気で編むときは」という映画を思い出しました。

「あてもなくひざ掛けを編む編むという行為を楽しむそれだけのため」

（横浜市）杉本京子、朝日花壇より

（S）

私の住んでいるマンションは、およそ 200 世帯の大所帯。

18 年前に 1 回目、9 年前に 2 回目、そして来年度は、3 回目の自治会が、私にとうとう回ってきました。

先日、約 20 人の人たちが集まり、次年度の役職を、決める時間となりました。

会長、会計、総務、美化、町内会…20 人全員が、それぞれが何らかの役割を担うことになります。

とはいえ、それぞれご事情があり、夜勤のお仕事があったり、ご家族の介護があったりと…、なかなか、すんなり決まりそうにありませんでした。夜 7 時から始まり、9 時を超えそうな雰囲気の中、私は、それなりに様子は分かってはいたので、とにかくお静かに様子を伺っていました。皆さんは、「この役は一緒にやりませんか」と声を掛けあいながら、比較的何とかなりそうな役割から、少しずつ決まっていきました。私も、一応、会計に手を挙げてみましたが…、結局、残るのは会長と副会長。

しばらく会場に静かな時間が流れましたが、ついに一人の方が、「では、私が会長をやります」と手を挙げてくださいました。思わず拍手が起り、ほっとした空気が広がりました。するとその方が、にこやかにこちらを見て、「副会長は金澤さんがなってね。じゃあ、私は会長するから」

「えっ…」

私、呼ばれた？めっちゃ笑顔で、私を見ている会長さん。

思いがけない流れでしたが、諦めた私は、このたび副会長さんを務めさせていただくことになりました。4 月から 1 年間、がんばるぞ!

（K）